



特集・南葵音楽文庫の重要資料

世界の音楽家たちとの交遊から

サイン本さまざま

サン＝サーンスの盟友ホルマンの愛奏曲

サン＝サーンス チェロ協奏曲【第1番】

来歴 手沢本



徳川頼貞と深い交友を結んだオランダの名チェリスト、ホルマン（1852～1926年）の旧蔵書。総譜のタイトルページにはホルマンの署名があり、楽譜の最初のページにはサン＝サーンス（1835～1921年）による献辞が記されている。パート譜には頻繁に使用された痕跡がある。ホルマンは南葵楽堂でこの曲を演奏した。

フォーレがホルマンに贈った

サイン入り楽譜《シシリエヌ》

来歴 手沢本

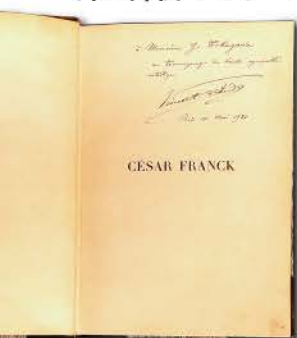
フォーレ（1845～1924年）の代表作《ペレアスとメリザンド》に登場する《シシリエヌ》のアメル社から出版されたチェロとピアノのための二重奏版楽譜。ホルマン文庫の1冊で、フォーレの署名が表紙とチェロ・パートの右上に記されている。



フランスの大作作曲家ダンディが頼貞に贈った

師の評伝『セザール・フランク』

来歴 手沢本



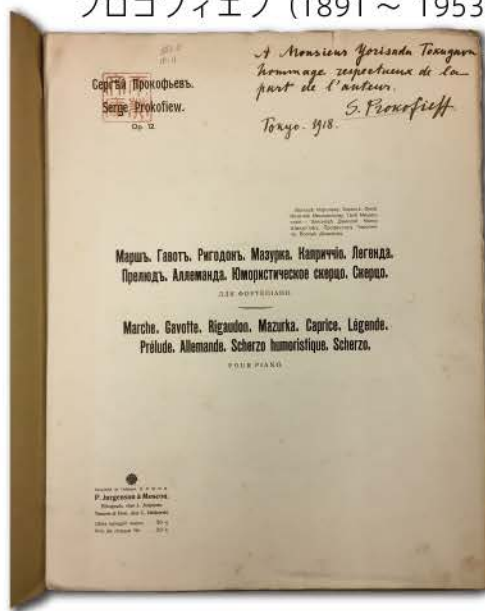
徳川頼貞は1921年の外遊の際に、パリの音楽学校スコラ・カントルムで同校の創設者ダンディ（1851～1931年）に会い、彼の演奏でダンディの師フランク（1822～90年）のオルガン曲を聴いた。このときダンディから頼貞に贈られた本書には、頼貞への献辞が記されている。

プロコフィエフのサイン入り楽譜

《スケルツォ》作品12-10

来歴 手沢本 日本近代音楽

プロコフィエフ（1891～1953年）が1918年、ロ



シア革命を避けての渡米の途上で滞在した日本で、徳川頼貞と面会した際に贈った楽譜。タイトルページに献辞がある。曲はピアノ曲《10の小品》作品12のなかの1曲で、作曲者の日本でのリサイタルやニューヨーク・デビュー・リサイタルなどで演奏された。

日本では南葵音楽文庫だけが所蔵

稀覯書の数々

南葵音楽文庫が国内で唯一所蔵

『モーツァルト作品全集』

希少性 音楽史研究

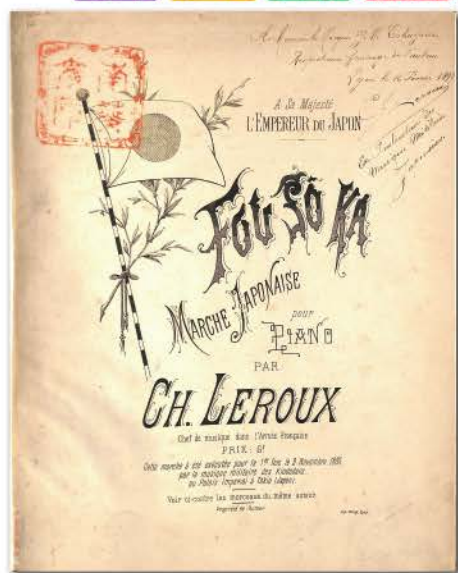
音楽出版社ブライトコプフ・ウント・ヘルテルがモーツァルト（1756～91年）の妻コンスタンツェの協力のもと、作曲家の死後7年を経て発刊した史上初の『モーツァルト作品全集』の第1部門全17巻セット（1798～1806年）。国内唯一の所蔵。

フランス軍楽隊長が日本を題材に作曲

ルルー《ピアノのための日本行進曲「扶桑歌」》

希少性 来歴 手沢本 日本近代音楽

日本吹奏楽の師で陸軍軍楽隊の演奏水準を飛躍的に発展させたシャルル・ルルー（1851～1926年）が、徳川頼倫のリヨン訪問時に贈呈した楽譜で、頼倫への献辞が入っている。現在国内で所在が確認されているこの曲の出版譜は、南葵音楽文庫所蔵のこの1点のみである。



ベートーヴェン《月光》ソナタ日本版初版楽譜

現存唯一の完全本

希少性 来歴 日本近代音楽

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第14番《月光》の日本版初版譜。1907年に雑誌『音楽』（楽友社）の綴じ込み付録として5回にわたり掲載された楽譜を音楽社が1冊にまとめ、1909年出版したものの。現在所在が確認されている2部のうちのひとつだが、付録解説に欠損のない完全本はこの1部のみ。



近代日本音楽の足跡を物語る資料たち

1924年、日本人によるベートーヴェン《第九》

初演で使用された楽譜

来歴 手沢本 日本近代音楽



旧ベートーヴェン全集版の総譜・管弦楽および合唱パート譜のセット。管弦楽のパート譜は、不足分を国内で筆写して補充している。ベートーヴェン（1770～1827年）の交響曲第9番《合唱付き》の日本人による全曲初演となった東京音楽学校による1924年11月29、30日、12月6日の演奏会のため

に頼貞が提供した楽譜と推測される。

ドイツでも高い評価を受けた音響学者

田中正平の理論書『純正律の研究』

日本近代音楽

南葵音楽事業部の評議員も務めた音響学者、田中正平（1862～1945年）によるドイツ語の著書。1890年にライプツィヒで刊行。田中は1889年に「純正調オルガン」を製作し、ドイツで演奏。本書はこの楽器の理論的基礎を形成する。田中は1932年に南葵音楽図書館でも純正調オルガンの講演と演奏をおこなった。



《アルプス交響曲》日本初演に使われた

世界で演奏権付き楽譜

来歴 手沢本 日本近代音楽

R. シュトラウス（1864～1949年）の代表作《アルプス交響曲》の日本初演（プリングスハイム指揮、1934年）で使われ、さらにパート譜の書き込みから、1916年のフィラデルフィアでのアメリカ初演、ニューヨークにおける初演



でも使われたことも判明。世界に3点しかない演奏権付きの楽譜である。

ワーグナー・オペラの傑作《ローエングリン》日本初の

全幕上演で使用された楽譜

来歴 手沢本 日本近代音楽



1942年に当時、南葵音楽図書館の蔵書が寄託されていた慶應義塾大学図書館から借り出され、同年11月23～29日に東京の歌舞伎座で行われたワーグナー（1813～83年）の《ローエングリン》全幕初演（グルリット

指揮、藤原歌劇団）で使用された楽譜。戦時統制を受けて公演時間を調整した跡が随所に見られる。



アジア初の音楽専用ホールと音楽研究図書館

充実の研究活動

南葵楽堂の開堂を記念する委嘱作品

序曲《徳川頼貞》

希少性 来歴 日本近代音楽

正確な題名は「序曲 東京の徳川頼貞へ」。徳川頼貞の英国留学時代の師ネイラー（1867～1934年）が、頼貞の委嘱により、南葵楽堂の開堂を記念して作曲。1918年の最初の音楽会で披露予定だったが間に合わず、1920年に初演された。パート譜のみが現存し、総譜は失われた。

徳川頼貞の自筆原稿

希少性 来歴 音楽図書館 日本近代音楽

『指揮者ヘンリーウッドに関して』

徳川頼貞によるローザ・ニューマーチ『ヘンリー・ウッド』の抄訳。原書も南葵音楽文庫に所蔵されており、頼貞による書き込みが見られる。頼貞は本稿執筆の翌年にロンドンでヘンリー・ウッド(1869～1944年)本人に会い、南葵楽堂に備えるパイプオルガンやコントラバスについて助言を受けた。



本邦初の校訂報告を伴う出版楽譜

辻荘一校訂ヘンデル《グロリア・パトリ》

音楽図書館 日本近代音楽 音楽史研究



カミングス文庫旧蔵の筆写楽譜にもとづく校訂楽譜。我が国最初の厳密な資料批判に基づく校訂報告を伴う楽譜出版であり、研究機関としての南葵音楽図書館の水準の高さを物語る。失われた筆写楽譜の冒頭部分の画像、添付されていた書簡などが記録されている点でも貴重。日本語版と英語版の2種が作られた。

なぜ南葵音楽文庫にこれが？

尽きせぬ興味、残る謎

第一次世界大戦のドイツ人俘虜が徳島で演奏に使ったリスト《フン族との戦い》の楽譜

希少性 来歴 手沢本 日本近代音楽



パート譜のほとんどは手書き。パート譜に書き込まれた人名や日付などから、徳島県の板東俘虜収容所のオーケストラが1919年12月1日に

行った演奏会で使用した楽譜であることが判明した。収容所が閉鎖されたときに購入ないし寄贈されたものか。

頼貞が会ったピアニスト、ブゾーニの旧蔵書名指揮者ビューローの書簡集

来歴

南葵音楽文庫に5巻所蔵されているビューロー(1830～94年)の書簡集のうち3巻には、ピアニストで作曲家でもあったブゾーニ(1866～1924年)の蔵書票が貼られている。徳川頼貞は1921年にローマでブゾーニに会い、彼の演奏を聴いた。そのときに譲り受けたものか。しかし頼貞の著作にそのような記述は見られない。



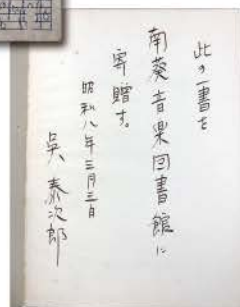
新進の日本人作曲家から南葵音楽図書館への寄贈本

呉泰次郎《主題と変奏》

手沢本 音楽図書館 日本近代音楽



呉泰次郎(1907～71年)がワインガルトナー賞を受賞した代表作のミニチュア・スコア(共益商社)。南葵音楽文庫には2冊が所蔵され、2冊ともこの曲が作曲された1933年の日付が入った南葵音楽図書館への献辞がある。しかしこれは南葵音楽図書館閉鎖後の日付であり、どのように受け入れられたかは未詳。

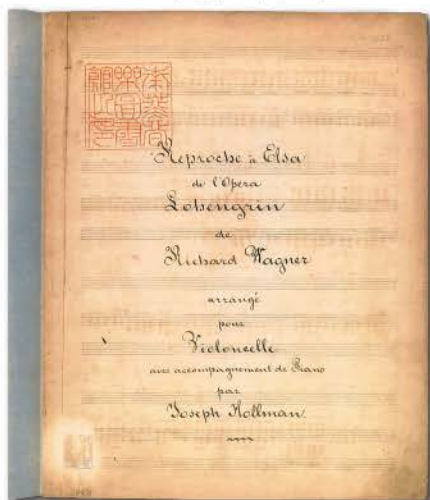


希少性 来歴 音楽図書館

南葵音楽図書館が楽譜出版を計画

チェリスト、ホルマンによるワーグナー編曲

ホルマン文庫に含まれるホルマン自筆の楽譜。ワーグナーのオペラ《ローエングリン》第3幕第2場で騎士ローエングリンが妻となった公女エルザに歌いかける歌をチェロとピアノのために編曲したもので、《エルザへのたしなめ》と題されている。南葵音楽図書館はこの楽譜の出版を計画したが、実現はしなかった。





今回のアカデミーは、プロコフィエフの来日時に交友をもった2人の日本人、大田黒元雄と徳川頼貞に焦点をあて、それぞれが若い作曲家とどのように交際をもったかを、前者については林淑姫氏が、後者については私が紹介しました。頼貞とプロコフィエフの交流については、2018年1月の南葵音楽文庫定期講座でも「徳川侯爵交遊録～大音楽家と出会った日本人(1)」と題してお話ししましたが、配信用コンテンツ作成のため、今回、あらためてこのテーマを取り上げることにしました。講演では、1918年のプロコフィエフ来日の経緯を駆け足で説明したあと、頼貞とプロコフィエフとの交流について、次の二点に焦点をあててお話ししました。①頼貞によるピアノソナタの注文。残念ながらプロコフィエフはこれを作曲しませんでした。どうやら両者の間で、注文をめぐってすれ違い(勘違い?)があったようです。②プロコフィエフが頼貞に贈ったピアノ曲の楽譜。これは《10の小品》作品の第10曲〈スケルツォ〉で、楽譜の表紙にはプロコフィエフによる献辞が記されています。この曲に関しては、講演の中でピアニストの宮下直子氏の演奏動画をご紹介しましたので、講演のあと、宮下氏に会場からご発言いただくことにしました。

私とプロコフィエフ

私が初めて知ったプロコフィエフの音楽は、《ピーターと狼》。これはもう、物心がついた頃から、中村メイコさんのナレーションで、フリッツ・レーマン指揮ベルリンフィルのLPレコード盤が擦り切れる程聴きました。

そして、多分小学6年くらいに来日したソビエト時代のロシアのバレエ団(レニングラードカキエフ)で観た、《ロメオとジュリエット》。ジュリエットの踊り手の可憐な美しさは勿論のこと、なんと言ってもプロコフィエフの音楽に魅了されました。余談ですが、終演後、出待ちをしていた小さな小学生の私に、楽団員が走り寄って涙ぐんでハグしてくれた事も忘れられません。当時ソ連という国が芸術家にとってどれ程厳しい国だったか、その頃の私には全く知る由もありませんでした。

その後、ピアノの道を歩む事になり、藝大3年生の秋、日本音楽コンクールに挑戦したものの本選に残れず打ちひしがれていた時に会ったのが、アルゲリッチの弾く、プロコフィエフの《ピアノ協奏曲》第3番のレコード(アバド指揮ベルリンフィル)でした。もう、あまりにも衝撃的な演奏で、どうしてもこの曲が弾きたくなり先生にお願いしてレッスンをして頂く事に。幸運なことに、学内でこのコンチェルトを演奏する機会を頂き、また、その後も留学中に急なキャンセルで代わりに大フィルと共演させて頂くことになり、大切なレパートリーとなりました。

何れにしても、20歳代の頃は、ただただプロコフィエフのこの作品の魅力に取り憑かれ、夢中になって演奏したものでしたが、彼が亡命者として体験した複雑な想いが秘められていることに気がついたのは、ずっと後の事でした。

それから、年月が流れ、今から6年前、南葵音楽文庫が和歌山県立図書館に寄託された事がきっかけとなり、再び、私はプロコフィエフのある作品とのご縁を頂きました。頼貞が1918年に、ロシア革命を逃れアメリカに亡命途中に日本に滞在したプロコフィエフと出会い、彼からプレゼントされた〈スケルツォ〉。これは、彼がロシアを離れる直前に作曲した《10の小品曲集》op.12の終曲。一見、組曲形式で書かれていますが、

宮下氏は、2022年の「南葵音楽文庫ミニコンサート」で、上記のプロコフィエフ〈スケルツォ〉を演奏されたほか、2023年12月16日の「南葵音楽文庫コンサート」でもプロコフィエフのピアノ曲、歌曲、室内楽曲を演奏されました。アカデミーでのご発言の中でも〈スケルツォ〉の演奏のことが話題に上りましたので、この機会に、ご自身のプロコフィエフの音楽との出会いや、〈スケルツォ〉を演奏することになったきっかけなどについて、宮下氏に書いていただきました。

なお、当日は、宮下氏につづいて、会場から貴重な発言が相次ぎました。篠田大基氏からは、頼貞とプロコフィエフが出会った1918年がどんな年だったかということについて、面白いお話を伺うことができました(南葵楽堂の開堂をはじめ、森永ミルクチョコレートの販売開始など…興味深い出来事がいろいろあった年でした)。また、沼辺信一氏からは、The Serge Prokofiev Foundationの機関誌『Three oranges journal』の第15号、Prokofiev in Japan (2008年)にプロコフィエフと頼貞との交流についての論考を寄稿されたこと等についてお話をいただき、たいへん充実した会になりました。(近藤秀樹)



▲南葵音楽文庫ミニコンサート2022「徳川頼貞～初々しい体験を胸に」
(2022年11月20日/和歌山県立図書館 メディア・アート・ホール)

中身はプロコフィエフ独特の書法が散りばめられていて、特にスケルツォは、脳も指も振れそうな難曲。

そして、このスケルツォだけが頼貞の手に渡り、南葵音楽文庫に眠っていたところ、手にとって見る機会があり、魔が差したとでも言いましょうか、一昨年、この小品曲から〈伝説〉と〈スケルツォ〉の2曲を「南葵音楽文庫ミニコンサート」で演奏させて頂きました。

プロコフィエフの作品は、複雑なハーモニーやリズムの中に隠された本当の魅力を見出すことが出来れば、自然と指も心も彼の音楽に寄り添い演奏する事が出来るようになるのですが、ただそこに至るまで、相当の覚悟と時間が必要!

お客さんにとっても、ユーモラスだったり皮肉たっぷりだったりするプロコフィエフの音楽は、ちょっと取りつきにくいかもしれません。そこで、12月16日の演奏会^(※)では、歌曲、ピアノソロ、チェロとのデュオ作品で、プロコフィエフの音楽を様々な面から楽しんで頂けるよう工夫しました。

かくして、南葵音楽文庫のおかげで、私とプロコフィエフとの縁はまだまだ続きそうです。私だけでなく、文庫をきっかけに、この音楽の魅力を一人でも多くの方に楽しんでいただければと思います。
(宮下直子/ピアニスト)

(※)南葵音楽文庫コンサート その式 「冬に想ふ～徳川頼貞とプロコフィエフ」
2023年12月16日、和歌山県立図書館 メディア・アート・ホール



南葵音楽文庫アカデミー 春のお知らせ

南葵音楽図書館 100年～歴史と価値をひらく

3月2日(土)

13:30～15:30

新宮市文化複合施設 丹鶴ホール 2階 大会議室

奥中康人 (静岡文化芸術大学教授) 幕末維新期における新宮と軍楽～スネアドラムの楽譜を中心に

美山良夫 (慶應義塾大学名誉教授) 「南葵音楽文庫」100年～今、その扉をひらく

3月3日(日)

13:30～15:30

和歌山県立図書館 (本館) 2階 講義・研修室

泉健 (和歌山大学名誉教授)・奥中康人 (静岡文化芸術大学教授)

林淑姫・佐々木勉・近藤秀樹 (南葵音楽文庫研究員) ほか

第1部①和歌山寄託の前史

②貴重資料のデジタル化

③和歌山寄託へ向けて

第2部①私と南葵音楽文庫 公開7年を顧みて

②歴史と価値をひらく：研究員による報告と座談

③歴史と価値をひらく：コメントと評価

*催しは全て無料です。
【要・事前申込】
詳細は別チラシ或いは
以下のWebsiteをご覧ください。



<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/academy/>

令和5年度 重要資料報告会

3月3日(日) 11:00～12:00

和歌山県立図書館 (本館) 2階 講義・研修室

南葵音楽文庫研究員による報告

【事前申込不要】

※詳細は南葵音楽文庫アカデミー 春
のチラシをご覧ください。



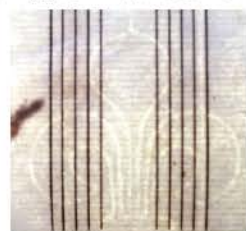
パーセル 《ディドとエネアス》 楽譜新版刊行

『南葵文庫』第6号 (2022年6月10日発行) の美山良夫氏の報告にあるように、南葵音楽文庫は、ヘンリー・パーセルのオペラ《ディドとエネアス》の重要な手写楽譜の一つを所蔵しており、イギリスのパーセル協会から2021年に新しい校訂楽譜 (パーセル全集第3巻の改訂版) が刊行された際には、校訂を担当したウェールズのバンゴー大学のブルース・ウッド教授にその高精細画像を提供しました。そしてこの度、2023年春に、また新たな校訂楽譜が、ドイツの権威ある楽譜出版社のベーレンライター社から原典版シリーズの一つとして刊行されました。

新版の校訂者は、アメリカのコロラド大学音楽学部のロバート・シェイ教授です。教授は、パーセルを中心とする17世紀イギリス音楽の研究者で、特に世界各地の図書館等に所蔵されるパーセルの手写楽譜の研究で世界的に知られています。和歌山県立図書館に教授から最初にメールが届いたのは、2021年9月でした。文面から察するところ、お手持ちの南葵音楽文庫の《ディドとエネアス》の手写楽譜の画像は、1970年代に撮影されたモノクロのマイクロフィルムによる複製画像のようで、画像からは十分に読み取れない、確認が必要な不鮮明な箇所

所が多数あったようです。手写楽譜に使用されている「紙」についての調査依頼もありました。

図書館からは、手写楽譜に残る、過去に演奏に用いた際のものと思われる書き込みの詳細や、使用されている紙についての情報、例えば、序曲と序曲以降では使われている紙が異なることや、序曲以降の部分の紙に見られる透かしの画像が、フルカラーの高精細画像 (2013年9月撮影) と共に提供されました。こうした紙についての情報は、それが使用された手写楽譜などの成立を明らかにしようとする時、しばしば貴重な手がかりとなります。



南葵音楽文庫所蔵手写楽譜
に見られる透かし (部分)

シェイ教授が執筆した新版楽譜の校訂報告によると、南葵音楽文庫の《ディドとエネアス》の手写楽譜の成立年代は、「遅くとも1774年以前」と結論づけられました。1774年は、26年に設立されたロンドンの古楽アカデミーによって、このオペラが上演された年です。他の資料との比較から、南葵音楽文庫の手写楽譜に含まれる楽譜の変更や指示書きが、この上演と関わりがあると認められることや、使われている紙に確認された透かしが、1770年から75年にかけてヘンデルが使用した紙にも見られることなどが根拠となっています。

近年、和歌山県立図書館には、しばしば海外の研究者から南葵音楽文庫の収蔵資料について問い合わせや、画像提供の依頼が寄せられています。提供する情報が、研究に役立つことを祈らずにはられません。 (佐々木勉)

南葵文庫第10号

令和6年1月19日発行

発行所

和歌山県立図書館

〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集

合同会社芸術資源研究所

〒640-8137 和歌山市吹上1-1-22 502号室

編集協力

有限会社ティアンドティ・デザインラボ

〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36